



新型コロナウイルスのもとで ~わたしはこう過ぎてきました・こう過しています~

〈vol.8〉

4人の息子たちと妻とのアットホームな日々

会員 竹澤 克己 (48期)

昨春に院へ進学した長男は、キャンパス閉鎖の中でも実験の関係で研究室に通い、マスクとフェイスガードの重装備で塾講師のアルバイトをしつつ、修論と就活に臨んでいる。

大学生で軽音部の二男は、キャンパス・ライブハウス・スタジオのクローズですっかり閉め出されてしまい、オンラインによる授業と理系特有の課題に取り組んでいる。

高3であった三男は、柔道部の主将として意気込んでいた大きな大会が相次いで中止になり、晴れの舞台が幻となってしまったが、大学に進学して新たな目標に向かっていく。

昨春に高校へ入学した四男は、入学式ばかりでなく6月半ばまでは授業すらなく、五里霧中な感じであったが、ようやく新たな友人もできて、美術部の活動を楽しんでいる。

ステイホームでは気分転換や運動が不足がちになるが、息子たちのおかげでそこが補われている部分も大きい。彼らもそれなりの年齢になり、各自の予定があるので、かつてのように家族が揃う場面ばかりではないが、いろいろな組み合わせが次々に出現してきて、その場面ごとの空気の違いや変化が面白い。性別には偏りがあるが、みんなが話に花を咲かせ、筋トレに興じたりして、私もそれに加わったり、時には希望者を募って趣味のサイクリングに共に出かけたりする。好き



な飲み歩きはすっかり自粛している私だが、成年の息子を見繕って食卓で一杯やり始める。その後に誰かが帰宅するごとに加わるように誘い（未成年はもちろん酒抜きで）、それならもう一本開けようか、あのつまみを出そうか、ジュースが無いなら買ってきなよ、などと言っている様は、居酒屋のようだ。

私と妻は、さながら小さな男子学生寮の管理人夫婦のようである。この寮の学生たちには、日々の生活にも性格にもそれぞれの成長と課題があり、妻とそれを話題にすることには、難しさも含めた楽しさがある。昔は、自宅での息子たちのあまりの騒がしさに、「ここは私設保育所ですか」などと笑えない声をかけられて肩身を狭くしたこともあったが、コロナ禍に青春を生きている学生たちの巣立ちまで、先輩として付き合っていこうと思うこの頃である。



こちらから読んでね

春 眠

